

月刊 まち・コミ 2009年12月号

● インフォメーション ● <http://park15.wakwak.com/~m-comi/>



● 今月の注目記事 ● P1~P3 私たち被災者にとって“震災”とは？

私たち被災者にとって “震災”とは？

阪神・淡路大震災から15年

語り部の思い

2010年1月17日で、阪神・淡路大震災から丸15年を迎えます。十年ひと昔という言葉がありますが、15年前の震災は、被災した人たちにとって、どのように記憶されているのでしょうか。今の生活に、どのような影響を与えているのでしょうか。

阪神・淡路大震災以後、新潟、能登、宮城など日本国内や、海外でも大地震による被害が続きました。いつ、どこで起こるか分からない天災を相手に、人間の力はちっぽけなもので、とうてい太刀打ちできません。それでも被害を最小限に食い止め、一人でも多くの命を救いたいと“減災”への取り組みが進んでいます。

まち・コミュニケーションでは、語り部ボランティアを募り、小・中・高校生を対象にした震災体験学習を続けており、来年で10年目となります。阪神・淡路大震災の様子を教えて欲しい、命の大切さについて学びたいと、今年はいくまで、11校と1団体がやってきました。

今号では、語り部ボランティアさんたち10人からうかがった震災15年の思いをお伝えします。



忘れない 忘れてはいけない
一・一七



なつかしい友のかお見て時の流れを

今改めて“震災”という言葉聞いて被災した人たちにとって、“震災”という言葉聞いたとき、どんなことが脳裏に浮かぶのでしょうか。語り部さん達に尋ねると、真っ先に出てきたのは「忘れてしまった・・・」という一言。その後、「地震直後のこと」「震災後の生活のこと」「早いなぁと思う」「あのときは若かったからなんとかあったけれども、今起こったらどうしようと不安に思う」「風化が気になる」と様々な答えが返ってきました。

地震直後については、5時46分の揺れた瞬間よりもその後の余震が怖かったこと、近所で火災が起こり自分の家も炎に飲み込まれたこと、何かが爆発する音が聞こえて怖い思いをしたこと、真っ暗だったのでろうそくに火を点けたら近所の人に怒られた(ガス爆発の心配)こと、裸足で逃げ出したことなど、今でも震度1程度で揺れたり、他の地域が地震で被害を受けたニュースを見ると、思い出そうです。「今でもよく、あのぐちゃぐちゃの中から出てこられたなと思います。」と、自身の力を感心する声もありました。

震災後の生活については、電気とガスがあるという当たり前前の生活ができなくなり困ったことを鮮明に覚えているようです。

現在の生活について

「震災後は、自分にできるお手伝いならさせていただこうという気持ちになりました。」と

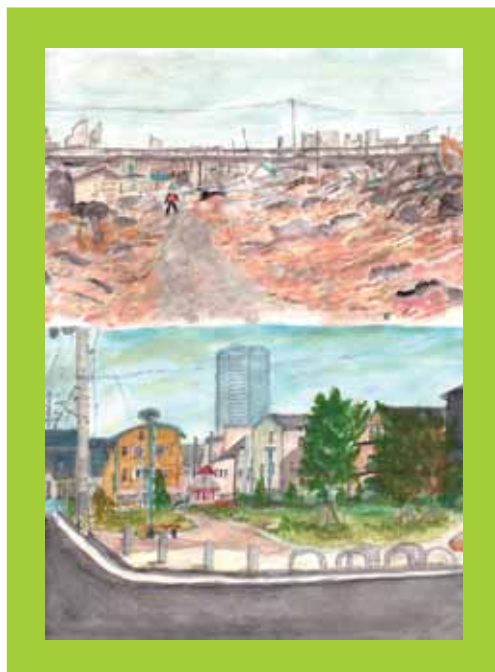
いう人も。語り部さんとして活動に参加している方は、比較的考え方が前向きで、活動的な人が多く、震災体験学習以外のまち・コミュニケーションの活動にも、どんどん参加してくださっています。

「新潟の地震で、生き埋めになってしまった子どもが助かったというニュースは本当にうれしく、涙が出ました。自分が震災に遭っているので、怖さやつらさがわかりません」と、他の地域が災害を受けたというニュースを見たときに、自分の感じ方が変わったなと思うそうです。

また、震災当時は水が出ず、水洗トイレが使えませんでした。そのため「トイレに行きたいと思えばすぐにいけるだけでも、ありがたいと思う」との声もありました。

震災学習について

2001年に名古屋市立日比野中学校の震災学習を受け入れたことをきっかけに、現在も震災学習を続けています。語り部さんたちがそれぞれ体験を話し、生徒と共に町を歩き、炊き出し体験をすることで、子どもたち自身が想像力を働かせ、いつ起こるか



語り継ぐあの日のことを
きれいになったこのまちで



類焼とめて尚生き残る 楠の大木

わからない災害への備えをし、家族にも伝えてほしいと願っています。

「生徒からの質問で、何に困りましたかと聞かれることがあるけれど、全てに困ったということが分かった上での質問なのかどうか・・・」という語り部さんの意見。

今年やってきた中学3年生は、震災後に生まれた生徒が含まれています。自分が生まれる前に起こった出来事を、どのように伝えればいいのか、はたして事実として受け止めてくれるのかどうか、語り部さん達の今の悩みです。そんな中でも「せめて1月17日に、阪神・淡路大震災が起こったということだけでも、覚えておいてほしい」「100人来た中で、2、3人かもしれないけれど、何かを感じ取って帰ってほしい」「震災にこだわらず、命の大切さを伝えたい」という思いがあります。また、語り部さんの中には「私だって戦争を知らないんだから、中学生達にとっては震災は同じような感覚だと思う」という意見もありました。

震災から時間が経つにつれ、どうすれば子どもたちに伝わるかという課題が大きくなっています。

全国みなさんに伝えたいこと

「全然被害に遭っていない人は、震災ってなんやっていう、そういう感覚だと思います。それでも、次は自分かもしれないという気持ちを持ってほしいです」

「全国から給水車など、あらゆる都道府県名の入った車がやって来て、私たちを助けてくれました。私たちは忘れられていないとわかり、本当にうれしかったことを覚えていて、今でも感謝しています。ありがとうございました」

「震災のことに興味関心を持ってほしいです。特に震災学習でやってくる生徒たちからは、どんどん質問してほしい。その質問から、私たちがどのように伝えればいいのかわかり、私たちの役割が見えてくる気がします」

「私たちが震災体験を伝えることで、なにか影響を与えることができたらと思っています」

「震災直後の火災で怖い思いをしました。みなさんも、どう逃げ切るか、生き残るかを考えておいてほしい」

2010年の新成人は、震災当時5才。震災を知らない世代がどんどん増えていきます。その中で私たちは、手探りながらも震災を伝える活動を続けていきます。

2010年1月17日で、震災から15年を迎える阪神・淡路大震災。今一度、災害への備えを確認していただきたいと思います。



電信柱 震災の痛み 忘れずに

1～3ページの絵と句は『御菅カルタ』から引用しました。このカルタは2003年に、御菅地区（御蔵通・菅原通）の住民や関係者らから句を集め、絵を依頼し、総勢132名で作った地域カルタです。まち・コミュニケーションで1部1000円（送料別）で販売しています。

みくらエッセイ

「帰るところ」

加藤 洋一

この九月に母の出身地である鹿児島県の沖永良部島に行って来ました。約一ヶ月間のキャンプ旅行の途中、祖父母の墓参りがてらに立ち寄って見たのです。そこで農業を営んでいる叔父や大叔母には、もっと頻繁に「帰ってくる」ように勧められましたが、今回じつに七年ぶり、三回目の訪島にすぎない私に「島に帰る」という感覚はありません。

そもそも自分の「帰るところ」というのがよくわかりません。「地元」? 「ふるさと」? 心理的には出身地である愛知県が一番近いような気もしますが、こどもの頃は親の転勤のため、県内外を転々としていましたし、中学卒業後は学生寮で生活し、実家は年に一〜二度顔見せに行くところという認識しかありません。家に上げてもらう時も「ただいま」ではなく「おじゃまします」です。日々のパンを買うお店やレストランといった生活スポットは、もちろん現在住んでいるアパート周辺にありますが、単なる「ネグラ」のイメージしかなく、そこで生活しつづける必然を感じることはありません。

「帰るところ」「ふるさと」といったものがあることが、人生の支えであると考えられている方は少なくないようです。また、「帰るところ」を失うこと(あるいは失ったと認識すること)で大きな喪失感を抱いている方がおられることも、例えば御蔵での活動を通じて知りました。私も歳を重ねるごとに「帰るところ」を必要としていくのでしょうか。

私がはじめて御蔵を訪れたのは2000年の夏、明石工業高等専門学校専攻科のインターンシップにおいてでした。前年末に共同再建住宅「みくらら」が完成し、地域の交流拠点である「プラザら」の活動が軌道に乗り始めていた時期でした。以降約五年間、プラザらでのイベントや再建調査、震災体験の記録、古民家を移築しての集会所建設といった事業のお手伝いをさせていただきました。私の関わったまち・コミュニケーションの活動には、震災で失われた「帰れる場所」の再生(あるいは創造)という一面があったと思います。

まち・コミを卒業後、長田区の別の地域にまちづくりに関わる職を得ました。仕事を通じて知り合う人の中には、「御蔵から来た加藤」を意識される方が何人か居られました。また、自分自身「御蔵出身」という肩書きもずいぶん使わせてもらいました。仕事で悩んだとき、「御蔵にもどりてえなあ」と感じたこともあります。まち・コミで経験したふるさとづくりのお手伝いは、実は私自身の「帰るところ」をつくるのにも通じていたのかも知れません。

最近会社を辞めまして、「今度はどこに行こうかな?」と楽しく思索する毎日です。こうしてどこでも行ける、なんでもできると考えて生活できるのは、御蔵で経験した多くの出会いのおかげに違いありません。今後もちょうくちよく元気を頂きに顔をだしますので、またよろしく願います。

○プロフィール○

かとうよういち

1979年愛知県生まれ。高専では建築、大学院では生活環境論を専攻。御蔵でまちづくりのお手伝いしながら、論文を書かせてもらいました。



こうべあいうおーく 2010

2010年1月10日(日) 開催決定!

1999年に第1回目が行われた「こうべあいうおーく」。地図を手に、各自が神戸を歩くことで震災への思いを馳せるとともに、参加者から千円ずつの寄付を募り、集まった寄付はNPO法人しみん基金・KOBÉを通じて市民活動に助成されるというイベントです。第2回目(2000年)からはまち・コミが通過地点となり、地域の有志でホットレモンを提供。昨年からは豚汁に代わり、震災当時使った大鍋で炊き出しをしています。

この機会に改めて、長田の町を歩いてみませんか?

2010年1月10日(日)

・スタート 大國公園(JR鷹取駅南東徒歩5分・野田北部) 9:30 ~ 10:00 受付

野田北部、鉄人28号モニュメント、大正筋商店街、丸五市場、本町筋商店街、シューズプラザ、水笠通公園、まち・コミなどを歩きます。

・ゴール 長田区役所前広場(予定) 11:30 ~ 13:00 受付

スタート時に寄付1000円を申し受けます

案内チラシは神戸まちづくり研究所ホームページをご覧ください。<http://www.kobe-machiken.org/>



大地のつぶやき

〓 年の瀬に思う 〓

九月半ばに当社の主要な得意先の修理工場が倒産した。お互いに創業昭和二十一年で敗戦直後の黎明期以来共に手を携えて地元で自動車産業の発展に尽くしてきたもの同士で、彼の方は三代目で当方は二代目だ。私の歴代自家用車の購入、車検、スポット修理等全ての面倒を見てもらっていた。九月十二日(土)も注文を聞いていたので調達した部品を十四日(月)朝一番に届けたら閉まっていた、扉に貼り紙があり、「御用の方は〇〇弁護士事務所へ」と電話番号併記の簡単なものがあるのみ。社員の方々も少し茫然自失の状態であった。錠前は変えられて中に入れない。何が何だか分からないと言う。

お互い創業以来六十余年二代三代と亘っていい関係で付き合ってきた。今迄一度だって金銭トラブルや遅延の要請はなかった。修理業界でも名門中の名門で四十路を出た三代目社長は業界の次期リーダーとして囑望されていたし、人望も高く評価されていた。私自身も礼節の正しい彼はまだまだ飛躍するだろうと思っていた。修理や板金に対する部品は当社が供給していて、相手先のエンドユーザーはいい得意先を多く持っていた。在庫車数も多く、広い工場には常に多くの車が入っていて職人が遊ぶ暇なくいつも忙しく仕事をしていたので修理や板金以外の原因に違いない。結果がある限り原因があるのだが不思議だ。二代目が亡くなって三代目に引き継がれて数年、この間に三代目の彼は一体何を学んだのであろうか。僅か一日、二日で得意先、仕入れ先はもちろぬ、社員の全てを裏切ってしまうものだろうか。倒産や破産は何度も遭遇してきたが予兆は知れる所で、今回のようなことは初めてだ。何か欠けている。社員とその家族が路頭に迷うことになった。今年は身近にまでリストラされた話やら倒産話を多く聞く。年の瀬の前に、もう一度商売の原点に戻り、気を引き締めなければならぬ。

株式会社兵庫商会 田中保三

まち・コミ活動報告

11/1 ~ 11/30

- | | | |
|---------------------------|-----------------------------------|---|
| 11/4 まち・コミ打合せ | 11/10 まち・コミ打合せ | 11/22 出石市民農園 |
| 11/5 中国語講座 | 11/10 福井ラジオ放送に電話出演
(台湾古民家移築事業) | 11/24 修学旅行おつかれさま会 |
| 11/6 出石市民農園 | 11/11 区民まちづくり会議
総会出席 | 11/26 中国語講座 |
| 11/6 木村さんへ原稿依頼 | 11/12 岡山市立藤田中震災学習 | 11/28 私の考える日本のサステイ
ナブルエリアデザインとコミュ
ニティアーキテクト
提案報告(宮定) |
| 11/7 出石市民農園 | 11/12 中国語講座 | 11/29 足立区防災訓練にて講演
(田中) |
| 11/8 出石市民農園 | 11/16 ~ 18 小野宗幸氏来訪 | |
| 11/9 読売わいず倶楽部
ウォーク相談受入 | 11/19 まち・コミ打合せ | |
| 11/9 千葉県立小見川高震災学習 | | |

ご支援、ありがとうございます。

11/1 ~ 11/30

賛助会員(新規・継続)

高井由水(兵庫県) 清野博子(大阪府) 石崎勝伸(兵庫県) 河野睦宏(岐阜県) 紅谷昇平(兵庫県)
澤田修一郎(京都府)

寄付

吉田節子(兵庫県) 尾崎実(大阪府)

協力

社団法人シャンティ国際ボランティア会(東京都) 株式会社兵庫商会(兵庫県) 【順不同・敬称略】

新規賛助会員募集&更新のお願い

まち・コミでは、さらに活発に活動を行うため、賛助会員を募集し、金銭面でのご支援をいただいております。会費は、事業推進のために活用させていただきます。賛助会員のみなさまには、会員特典をご用意しておりますので、ぜひ賛助会員への登録をお願いいたします。

また、賛助会員は1年更新とさせていただきます。現在賛助会員の方も時期がきましたら、更新をお願いいたします。(期限は、「月刊まち・コミ」郵送時の封筒の、宛名の下に記載していますので、ご確認ください。)

会員特典

本誌「月刊まち・コミ」の送付。

まち・コミュニケーションに関する、Eメールでの情報送付、WEBの特別ページの参照

よろしくおねがいいたします。

編集後記 今年の震災学習は、新型インフルエンザの影響で、キャンセルや変更がありましたが、11月12日で無事終了しました。(戸)

年会費

個人・法人 年間5000円
学生 年間3000円

郵便振替口座番号

00950-3-42788

口座名称

「まち・コミュニケーション事務局」

2009年12月1日発行

編集/発行 まち・コミュニケーション

定価 100円

御蔵事務所 〒653-0014

神戸市長田区御蔵通5-5

TEL 078-578-1100 / FAX 078-576-7961

東京事務所 〒162-0052

東京都新宿区戸山1-24-1

早稲田大学文学部浦野研究室内

神奈川事務所 〒214-8580

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1-1

専修大学文学部大矢根研究室内

e-mail m-comi@bj.wakwak.com

URL http://park15.wakwak.com/~m-comi/